

# 祈りあふれる大地



供物を火に投じるホーマの儀礼。この儀礼が日本に渡って「護摩」になったと言われている



南インドの典型的なヒンドゥー寺院の様子。真ん中奥に見えるのはゴープラムと呼ばれる塔門で、神々の彫像で埋め尽くされている



カルナータカ音楽のコンサートの様子。左より両面太鼓ムリダンガム、素焼きの壺太鼓ガタム、ボーカル、バイオリン



ヴェーダを詠唱するバラモンのグループ



カルナータカ音楽のコンサートの観客。コンサートに参加するだけで「魂が引き上げられる」という人もいる



象の頭を持つ神ガネーシャに祈りを捧げる



南インドの聖なるカヴェリー河で沐浴・礼拝していた男女は、いつの間にか水を掛けふざけあっていた。南インドらしい牧歌的な風景



南インドの田園風景。温暖で肥沃な土地は豊富な農業生産をもたらす



寺院で出会った男性。聖灰で額に横に引いた三本線からシヴァ派であることがわかる

インドを訪れる者がなによりも感銘をうけるのは、この地の人々の信仰心の深さではないだろうか。日常のなにげない生活の中にも、空気のように当たり前に「祈り」がとけこんでいる。

「カルナータカ音楽」と呼ばれる南インドの古典音楽を好きになり、南インドに通いはじめてから17年になる。最初はひたすら音楽そのものを楽しんでたが、いつの間にか音楽だけでなく古典音楽シーンのあり方や、音楽の背景にある信仰心に惹かれるようになっていった。カルナータカ音楽は、つまるところヒンドゥー教の宗教音楽。中世以降に作られた神への讃歌が今なお歌い継がれる。いわばインドのクラシック音楽で、西洋古典音楽に比肩するほどの長い歴史や理論体系を持つ。メロディやリズムも高度に発達し、その起源ははるか2500年ほど前に成立した聖典ヴェーダにあるとも言われる由緒ある音楽だ。観客は音楽を純粹に楽しむとともに、歌詞に出てくる神々の名前を聴いては神を想起し恍惚の表情を浮かべたりもする。コンサートに参加するというのも一つの宗教的行為なのだ。

インド独自の宗教であるヒンドゥー教では「祈り」はさまざまなかたちをとる。神像を拜む、全身を投げ出して神に捧げる、ホームと呼ばれる献火儀礼を行う、神の名を唱え歌うなど――異邦人の僕らの目にはフォトジェニックで、心惹きつけられる。

「神のいない音楽は音楽ではない」

あるヒンドゥー教寺院で出会った男はそう言った。おごることもなく、カッコつけるわけでもなく、太陽が東から昇るといふ実に当たり前のことを言うのと同じように、何も疑うことなく放たれたその言葉。音楽をこよなく愛する人間の一人として、この現代においてもなお音楽が「祈り」、つまり信仰の手段として存在しうるということに驚きつつもうれしく感じた。

インド南東端のタミル・ナドゥ州の暦では12月半ばから始まるマールガリ月は聖なる月とされ、結婚式などの世俗的な行事を執り行わずに宗教的行為に没頭すべき月とされている。人々は夜が明ける前から寺院の周りを練り歩き、朗々と神への讃歌を歌い上げる。街が起きだすより先に神々しく響き渡る歌声と楽器の音色。にぎやかな一日が始まる前のスピリチュアルな利那はとてつもなく美しい。登校前の小学生たちがこういった宗教讃歌に参加するのを見たこともある。まるで夏休みの早朝にラジオ体操に参加するかのよう、制服姿の子どもたちが大人に混じって元気よく神の名を歌い唱え、神への供物のお下がりをいただいたり、学校へと向かう。小さな頃から、いやおそろくはこの世に生まれ落ちた瞬間から、日々の暮らしの中で当たり前のように大いなるものの存在とその恩寵に触れ自らの卑小さを自覚しているのだろうか。南インドの人々は謙虚で自らをわきまえ、他人

に対しても大らかな人が多いように思う。

ヒンドゥー教寺院内を散歩しているとヴェーダを詠唱しているバラモン（ヒンドゥー教の司祭階級）のグループを見かけた。口承により長い間伝え続けられてきた神秘的な響きに気持ちよく耳をかたむけてみると、ふいに札束を持った男が現れてグループに手渡した。バラモンのリーダーはそれを受け取ると、お札をヴェーダを詠唱する一人ずつに分けていった。ヴェーダの詠唱やヒンドゥー教の教義の研究などに従事するバラモンは肉体的な生産活動を行わず、寺院からの手当て以外には収入がない。札束を渡したのは、ヴェーダを尊いものと考え、それを伝承するバラモンの社会的役割をサポートする市井の人だった。自らの文化に対する誇りが「祈り」を支える行動となっていた。



祈りを捧げる無私なる姿。妙なるメロディにのった神への献身。それは悠久の歴史を持つ遺跡や大自然ともならぶ、インドの秘めたる美しさだ。周りを見ればそこかしこにあり、耳をすませばいつでも聞こえてくる。

井生明(いおうあきら)

1971年、福岡県北九州市生まれ。写真家。南インドの古典音楽・舞踊・儀礼などをメインテーマに、インド全般、東南アジアの芸能・インド外のタミル人コミュニティの様子などを幅広く撮影する。共著に「南インドカルチャー見聞録」(阿佐ヶ谷書院)、著書に「ひよっこダンサー、はじめの二歩」(玉川大学出版部)。



左：小学生も大人に混じって神への讃歌を歌う。額にはヴィシュヌ派を示すしるしをつけている／中：寺院で全身を投げ出してひれ伏し神への献身を示す／右：マールガリ月の早朝の様子。神への讃歌を歌う者も崇拜の対象となる